1.

「男の子だから暴れん坊。」

子供時代の私は（今は変わっていると願いますが）わがままで気性が荒く、自分勝手な行動ばかりする手のかかる子でした。そのため、穏やかで落ち着いている姉とは対照的に、私は親にしょっちゅう怒られていました。怒られる時に決まって親が口にしたのが、「ジェイクは男の子だから仕方ないね」という言葉でした。今思い返すと、私が自分勝手な行動をとって怒られるのと姉が同様にして怒られるのとでは状況がまるで違っていました。私の場合は「男の子だから」という前提が親の頭の中に存在していたため、怒りもそれほど激しくなく、諦めと許容が先行していました。対して、普段おとなしい姉がトラブルを起こすと、親は容赦なく怒鳴りつけ、私と比べて明らかに厳しい指導を行なっていました。この対応の違いは、異なる性格に応じた個別的な指導というのみでは説明できないものでした。女は控えめで奥ゆかしく、男はたくましくてアグレッシブというジェンダー観が少なからず作用した結果生まれたものでしょう。このように、我が家では幼少期からの子育ての方法が男女で明確に区別されており、早い段階から家庭内でジェンダートラックが形成され、それに沿ったコンディショニングが行われていました。特にここでみた指導の違いの結果は今の私と姉の性格に顕著に現出しており、私は積極的で闘争的な妥協しない性格で、姉はどちらかというと控えめで追従的な性格の持ち主です。ジェンダーが違えばおそらくこれらのパーソナリティも異なったものとなっていたでしょう。

「男の子だから論理的」

もう一つ、子供時代から繰り返し親に聞かされた言葉があります。それは、「あなたは男の子だから考え方が論理的」というものでした。私の母親は男女の脳には構造的な違いがあると強く信じており、その脳の構造の違いにより男は論理的な思考を、女は情緒的な思考をする傾向が強いと思い込んでいました。無論、これは根拠のない疑似科学であり、例え百歩譲ってそのような生物学的な傾向が微弱に存在するとしても社会的な環境要因に比べたらそれが人の性格や思考に与える影響は無に等しいでしょう。しかし、母親にはそんな事実は関係なく、ジェンダーに対する偏見を固持していました。そのため、私は物心がついた頃から母親に「あなたは論理的なんだ」と言い聞かされ、また男性の論理的な思考の方が女性の感性的な思考より優れていると思い込まされて育ってきました。こういった教育が私の考え方や興味の対象に与えた影響は計り知れません。私は自分を論理的な人間であり、そのために優秀であると錯覚するようになり、勉強の分野でもよりロジカルな数学や社会科学を重視して文学や芸術を軽視し、本も小説より技術書や教養書、特に社会科学分野の本を多く読むようになりました。この時の社会科学との出会いと、本当の論理的思考との接触が私の偏見や先入観を明らかにし、特にジェンダーに関しての今までの自分の非論理的な姿勢に気付かされたのは皮肉なことです。恐らく自分が男であり、母親から徹底したジェンダーバイアスの教育を受けなければ、自分が社会科学に興味を持ち、それに基づいて進路を決めることもなかったでしょう。それどころか、考え方が根本的に違っていたでしょう。